

コマンド・ガールズ 2

ケネス・ハートフォードの映画「HELL SQUAD」より



—— 冷戦時代から中東は当時から世界の火薬庫だった。

ン連の後押しを受けたテロリストたちと、西側と同盟する勢力とが、砂漠のあちこちで衝突していた。

テロリストの一味が、米国大使の子息を誘拐する事件は、そんな最中に起こった。

テロリストの要求に屈すれば、世界は破滅へと向かうことは明らかだったが、だが、悪が栄えた試しはない。

世界最強の美女たちが、

邪悪な企てを阻止すべく立ち上がるはずだった。

登場人物

ジャン

27歳。元CIA。身長174センチ。鮮やかなストレートの金髪。プレイメイトを思わせるワイルドな美貌。

ティナ

25歳。いちばんの長身で180センチ。北欧系の端正な美女。ちょっと皮肉屋だが冷静なリーダー格。

モーリーン

25歳。ショートカット。ラテンの血が混じった情熱的な潤んだ眼。身長は178センチ

リサ

20歳。赤毛。十三歳で家出。パンク歌手のような鋭い顔つきに、油断のない向上心に溢れた眼。

ローレン

21歳。東部の出身。マサチューセッツ工科大学中退。典型的なワスプ顔で教養がある。

キャシー

18歳。カンザス出身。田舎くさく、白い肌にちよつとだけソバカスが残る。1メートルを越える、いちばんの巨乳。

2



「キャシー、もつと銃を安定させて！」

射撃練習場。ずらりとライフルを構えて並んだショーガールたちを指導していた軍曹のピートが声を張り上げた。

キャシーは、二十人のなかでもつとも胸が大きい。銃床を脇に挟んで構えるのだが、1メートルを越えるバストが邪魔をするのだ。

キャシーは慌てて銃を構え直したが、どうしても挟み込むことができない。

「キャシー、いい加減にしたまえ」

ピートはツカツカと軍靴を鳴らしてキャシーに近寄った。190センチ近い長身、ブロンドの髪を短く刈った精悍でハンサムな面構えだ。

「こうやるんだ、いいか……」

キャシーの背後に回って銃の構えさせたピートの眼に、肩ごしに今にも薄いスポーツブラを破って飛び出しそうなキャシーの乳房の深い谷間と、透ける乳首が眼に入った。

「ん……、なんとか自分で考える」

ピートは頬を真っ赤にして去った。

「かわいい」

キャシーは隣のリサをつつついた。迷彩を施したアメリカ陸軍軍曹のズボンの股間が、明らかに膨らんでいた。

「それに大きそうね」

赤毛のリサは唇をなめた。

「アーミーナイフは、このように食事にも使えるが、武器にもなる」

伍長のマイクが、横一列に並んだ美女たちにナイフを配った。美女たちは、フォークや缶切りのついたアーミーナイフを珍しそうに弄んでいた。

「いいか、人を刺す時には……」

マイクは、相棒の二等兵を横に立たせ、ナイフを上段に構えて、ふりおろし、心臓の寸前と止めた。

「これでは、肋骨にぶつかって刺せない。だから……」

今度は、下から腹部を抉るように突き上げた。

「肋骨の下から突き上げて心臓を突くんだけ」

「そのくらい、知ってるわ」

リサが笑顔で呟いた。

「え、やったことあるの？」

マサチューセッツ工科大学中退のローレンが目丸くする。

「殺したことはないけど……私が十代を過ごした場所じゃ、常識よ」

「リサ。私語は慎め」

マイクがリサを指さして怒鳴った。

「アイ、サー！」

リサはさっと挙手の礼をし、サッと腕を振った。

ナイフがぶんと唸りをあげて宙を切り、伍長のアーミーベルトのバックルに突き立った。伍長は蒼白の表情で棒立ちになった。

「これをマスターすれば、どんな鍵でも開けられる」

曹長のウイリアムは、オートロック形式のドアに、プラグを差し込んだ。プラグのコードは、掌サイズのノートパソコンに繋がっている。荒くれの軍人のなかで、スマートで優しそうな眼鏡をかけた、美男子だ。

ウイリアムがキーを叩くと、キーは簡単に開いた。美女たちは拍手した。

「さて、誰かトライしてみるかね」

「ハイテクは苦手よ」

リサが俯いた。キャシーが同調した。

「同感。ビデオの録画だって、よく失敗するもの」

「私、やりませ」

ローレンが手をあげた。曹長がローレンにパソコンを渡し、再び施錠した。

ローレンはしばしキーを叩いていた。曹長が何か言いかけると、

「しっ、いまキーワードが見つかりそうなの」

と制し、やがてパッドとドアが開いた。

「やるな」

曹長は素直に顔をほころばせた。ローレンは軽くウィンクしてみせた。

「戦車って暑いよね」

ティナが汗を拭いながら、隣に座ったモーリーンに言った。

「これはソ連式なんだ」

背後に座席で指導する戦車兵のエリックが言った。

「居住性は重要視されていない」

「わざわざ、ソ連の戦車で？」

ティナが肩をそびやかした。

「アフガンにでも行けっというの？」

「そこまでは俺たちも知らされていないさ」

陽気な戦車兵のトビーが答える。

「だが、こいつはホットなだけじゃない。貫通力もある。敵に回せば厄介だ」

「どうせなら、ホットな男に貫通してほしいわね」

モーリーンは情熱的な瞳を二人の戦車兵に向け、グラマラスな体をくねらせた。

「訓練が終わってからだ」

生真面目なトビーが、洗面をつくった。モーリーンは背後に手を回し、すっと彼の股間を撫でた。トビーがぎよっとして飛び上がった。モーリーンはウィンクした。

「あなたのも貫通力、ありそう」

基地の中央はマットを敷いた道場になっていた。二十人の美女たちに囲まれて、ピートとマイクが説明した。

「今から、格闘の訓練を行う。これはスポーツじゃない。戦いだ。相手の急所を徹底して狙え。まず額の中央、ここだ。それから鼻柱。両手で耳を叩いて一瞬麻痺させるのもいい。さらに爪先も効果がある。それから……」

「金玉！」

リサが叫んだ。美女たちはいっせいに笑った。

「いい答えだ」

ピートは苦笑した。

「だが、ただ一か所を責めても仕方がない。連続技を仕掛けることが大事なんだ。そして最後に相手を抑えつけて、息の根をとめる。そこまで徹底してやらなければ反撃を喰う。わかるね。じゃ、誰か最初にやってみる者はいないか」

「はい！」

キャシーが手をあげた。

「お、君か」

ピートは笑った。

「射撃の汚名挽回だな」

キャシーはちよつとムツとしたがすぐに笑顔を作った。

「さ、どこからでも攻撃してみたまえ」

ピートはマットの中央で、だらりと腕を垂れたまま、キャシーをうながした。

キャシーもまた、だらりと腕を垂れたまま、ただ笑っている。

「どうした。攻撃してくれなきゃ訓練にならないか」

ピートは両手を左右に広げた。その瞬間、キャシーはぱつとスポーツブラをめくった。みごと実った乳房が露になった。ピートが眼を見開いた。

その瞬間、キャシーは突進した。ピートの両耳を叩いた。ピートは一瞬、目をくらくらさせた。

「やあっ！」

キャシーの右脚がはねあげられた。爪先がピートの股間を襲った。ピートはびくりとし、腰を引こうとして硬直した。

キャシーの素足が、ピートの股間で止まっていた。

彼女は足指で、ピートの陰囊を挟み込んでいたのだ。

「ふふ……このまま潰してあげてもいいのよ」

美女たちは一斉に拍手喝采した。ピートは冷や汗を拭った。

「わかった……潰されちゃ困る。これは模擬訓練だ」
キャシーは笑って足を下ろした。

一週間後。

合格者が発表された。

ジャンをリーダーに、ティナ、モーリン、リサ、ローレン、キャシーの六人が選ばれた。残る十四人のショールガールたちは、八〇〇〇ドルを受け取り、名残惜しそうにベガスへと帰っていった。

「やったね！ 五万ドルよ！」

キャシーははしゃいで、水しぶきをあげた。

合格発表後、五人の選ばれた美女戦士たちは、基地内部のプールでひさしぶりにリラックスした。ジャンだけが、基地司令部に呼ばれた。

みな、色とりどりのビキニで、素晴らしいボディをほんの少しだけ包み、長く美しい脚をばたばたさせて冷たい水の感触を楽しんだ。

「さあ……選ばれてよかったかどうかは、分からないわよ」
ティナが言った。

「どんな任務だか……戦車、格闘、ナイフ、銃……」

「たしかに、成功したら金と名声は手に入りそうね。何より、すつごいスリルを味わえそうよ」

モーリンが両手を思い切り伸ばし、豊かな胸を突き出した。

「ぞくぞくしてきたわ」

「命懸けの任務よ」

ローレンが微笑んだ。

「でも、たしかにベガスで踊っているより、生き甲斐を感じるわ」

「天下御免で、思い切り暴れられる」

リサが、唇に指をあて、きつと眼を見据えた。

「ナイフをばんばん、振り回してね」

キャシーがからかうように言った。リサが言い返した。

「あんたは好きなだけ、男の玉を潰せるってわけね」

「みんな！」

プールサイドにジャンが立っていた。傍らにジャックもいる。

「ジャン！ あんたも水に入れば？」

ティナが手を振った。

「あんたもよ、ジャック！」

モーリーンがながしめをくれた。

「いや、ぼくは遠慮するよ。それでもシャイな性格でね」

ジャックが微笑んだ。美女たちはいつせいにブーイングを浴びせた。

「君たちの任務を説明する」

美女たちはいつせいに口を噤んだ。

「明日出発だ。行き先は、中東だ」

それより十日前。

中東某国のアメリカ大使の息子が誘拐された。犯人の要求は、アメリカが開発中のウルトラ中性子爆弾の製造法を教えろというものだった。

C I A は必死に、誘拐犯の行方を追った。だが、ソ連も中東諸国も犯行を否定した。実際、彼ら反米国家の関与は認められなかった。

だとすると、テロリストグループの犯行ということになるが、P L O など高名なテロ団体もまた、事件に関与した形跡がない。

「現在の国際情勢からして、表立って政府や軍が動くわけにはいかない。だから、君たちの出番というわけだ。君たちは、その国の首都の高級ホテルのダンサーとして入国してもらう。指令はアメリカ大使館から出る。ぼくは君たちとは別行動になる。大使館の指示に従ってくれ」

「アラビアのロレンスみたいに、砂漠でゲリラと闘うわけね」

ティナが言った。

「もし、断れば、どうなるの？」

ローレンがやや不安そうに訊ねた。

「事件が解決するまで、ここに滞在させられるそうよ」

ジャンが俯いて答えた。

「秘密保持の名目でね」

美女たちは押し黙った。

「そうなると、五万ドルは受け取れない……よね？」

キャシーが言った。ジャンはうなずいた。

「退屈な時間には飽き飽きよ」

ティナが言った。

「中東には興味があるわ。お酒が呑めないイスラム教はノーサンキューだけど」

ローレンが笑った。

「ちょっとは歯ごたえのある相手だと、嬉しいわね」

リサが不敵に呟いた。

「ここのほうが、いい男は多そうだけど」

モーリーンがコケティッシュに首を傾げた。ジャンが手を叩いた。
「決まりね！　じゃ、さっそくお別れのパーティよ　お世話になった兵隊さんたちに、御恩返しをしなきゃ！」

らんちき騒ぎを終えた美女と野獣たちは、それぞれカップルになって個室へと戻っていった。

「ソ連の戦車より、砲身が長そうね」

モーリーンはトビーにびったりと寄り添い、股間を撫でた。

「それに……太いぜ」

トビーはモーリーンの耳筋にキスをした。

「あなたって最高よ。楽しいし」

ティナは、陽気なエリックの首に両手を回して囁いた。

「一晩中、楽しませて」

「十三歳で家出して……それからいろいろあったわよ」

リサは、グラスを傾けながらマイクに言った。

「身を守るために、なんでもおぼえなきゃ、生きてはいけなかった」

「前歴を問うほど、合衆国は野暮じゃないさ」

マイクはリサの肩に手を回した。

「君の得意技を、国のために発揮してくれ」

「まだまだ改善の余地はあるわよ」

ローレンは、床に並べたハイテク武器のひとつひとつを手にながら言った。

「この機械のチップは、アメリカ製？」

ウイリアムは答えた。

「そうだよ」

「これだったら、アキハバラで安くいくらでも、もっといいのが手に入るわ」

「アキハバラは行ったことないんだ」

「任務が終わったら、一緒にどう？」

「いいね……スシの製造器でも買いにいこうか」

「あのと、潰さなくてよかったわ」

キャシーは、ピートの股間の高まりを撫でまわし、先端に唇を寄せた。

「もつとひどいこと言われたら、ほんとに潰しちゃったかもよ」

「これまで何人、潰したんだ？」

ピートは心地よげに息を荒くしながら訊ねた。

「いい男のは、潰さないで味わうの」

キャシーは顔を沈めた。

「みな、優秀な兵士だ」

ジャックは、ジャンの滑らかな腹部に舌を走らせながら言った。

「君のおかげだ……礼を言うよ」

「礼には早いわ」

ジャンはジャックの髪の毛を撫でながら答えた。

「生きて帰ってきて、五万ドルを受け取ってから、改めて言ってね」

「君なら、生きて帰れるさ。カリブ海で軍政権を二つ潰した君じゃないか」

二日後。

中東某国のアメリカ大使は、ずらりと並んだ六人の美女たちに目を丸くし、それからジャックに向かって、厳しい口調で言った。

「ベガスで何をやってきたんだ？」

大使は、デスクに飾った息子の写真にちらりと眼をやり、苦悩の色を浮かべた。

「必要なのは、腕利きの工作員と兵士だ。ショーガールじゃない」

「彼女たちは、ただのショーガールじゃありません。訓練を受けた兵士です。格闘術、射撃、爆破……すべてに置いて優秀です」

「わが軍の特殊部隊を使うべきだ」

「いえ、彼女たちにはショーガールの名目で入国させました。誘拐事件がおおっぴらになつていない以上、正規の部隊は使えません」

「で……その腕前はどんなものなんだ」

そのとき、ドアが開いた。銃をもったアラブ人が六人、オフィスに乱入したのだ。

「テヲアゲロ！」

先頭の男がたどたどしい英語で怒鳴った。

次の瞬間、その銃が宙を待った。ジャンがすばやく、銃を蹴りあげたのだ。

つづいて、ジャンの回し蹴りが男の鼻先に炸裂した。男の鼻は折れ、血を噴いた。男は顔を伏し抑えてうめいた。ジャンはすかさず、から空きの股間を蹴りあげた。男は悲鳴をあげて突っ伏した。その後頭部をジャンは蹴りつけて失神させた。

他の五人の美女たちも同時に男たちを無力にさせた。

リサはさっと太股に仕込んだナイフを抜いて、なげつけた。ナイフは一人の男の右腕に突き刺さった。リサは、素早く接近し、股間を膝で蹴りあげた。男は体を折った。リサはその後頭部に手刀を浴びせた。

キャシーは、一人の男の背後に接近し、股間をつかんだ。男は悲鳴をあげて棒立ちになった。キャシーはそのままギョッとねじった。男の睾丸は彼女の掌のなかでぐしゃぐしゃに潰れた。長身のティナは小柄な男に駆け寄り、何度もその股間を膝で蹴りあげた。身長180センチ、股下1メートルに近い彼女の脚が思い切り撥ね上げられ、男の小柄な体が何度も宙に浮き、どさりと床に倒れた。

ローレンは、さつとバッグからダーツのようなものを取り出し、男になげつけた。先端の針が、男の股間に突き刺さった。男は悲鳴をあげた。ローレンは腕時計のボタンを押した。ダーツが破裂した。男は血まみれの股間を抑えて倒れた。

ただ一人残った男は、あつという間に倒された仲間たちを見回し、うろたえた。モーリーンが体をくねらせながら、男に迫った。

「あら、いい男じゃない」

モーリーンは男の頬を撫でた。胸の大きく開いたミニのドレス。女性の身体を見慣れていないアラブ人は、眼を丸くして深い乳房の谷間に見入った。

「でも私、髭はきらいなの」

モーリーンは男の両耳を叩いた。男は棒立ちになった。その股間をモーリーンは蹴り上げた。

「相変わらず乱暴なやり方ね」

ジャンは非難するようにジャックを見つめ、それから床に転がって呻きながら悶絶するアラブ人たちを指さした。

「こいつらも、あんたが雇った無頼漢たち？」

「強盗、レイプ魔、密売人……いなくなっただろうがこの国のためって連中だ」

ジャックは冷静な表情を崩さず、大使に向かった。

「腕前は……こんなものです」